

# 我が国におけるアジサイの植栽に対する嗜好の時代変遷

大澤啓志<sup>1)</sup>・新井恵璃子<sup>2)</sup>

- 1) 日本大学生物資源科学部  
2) 中日本高速道路株式会社

**摘要:**花木であるアジサイの植栽利用に関する文献類の渉獣を行い、その植栽に対する嗜好の時代変遷を考察した。また、観光対象としてのアジサイ寺の成立時期について、文献・ヒアリング調査を行った。嗜好の時代変遷では、鎌倉時代頃から庭への植栽が普通となり、江戸時代にはアジサイの栽培・増殖法も記された出版物が発刊されるとともに、「花が多数群れ咲く」ことへの嗜好の萌芽が認められた。明治以降も庭への植栽は普通に行われており、またセイヨウアジサイの輸入が始まり、公園等に群植がなされていた可能性もあるものの、直ぐには今日のようなブームにはならなかった。この間、「アジサイと社寺」の関わりを示す資料が認められた。そして1960年代以降になって明月院（神奈川県鎌倉市）に群生するアジサイが多くの人の目に止まり、これまでには無かった新たな観賞価値がアジサイに付与され、今日的な嗜好が確立されたと考えられた。各地で植栽される観賞用の緑化植物の一つであるアジサイについて、「庭の花木」を経て「社寺の花」という文化を底辺に持ちつつ、今日の「群生する花の美」の価値が生じた過程を明らかにした。

**キーワード:**花木、アジサイ寺、名所、群植

## 1. はじめに

我が国の観賞用植物と人との関わりの歴史、すなわち園芸文化は世界に冠たるものがある。特に江戸時代には園芸活動の流行が公家・武家等の上流階級に止まらずに一般民衆にまで広がり、我が国の園芸文化の一つのピークとされる。中でも花が鑑賞対象とされた木本植物すなわち花木は、例え各地方の桜並木の存在に代表されるよう、緑化植物として積極的に植えられてきた。しかしながら、観賞対象となる植物の好みは時代により流行り廃りがあり、例えば奈良時代の『万葉集』<sup>46)</sup>で最も多く詠まれた萩は、以降平安期の勅撰和歌集では著しくその数を減らしている<sup>34)</sup>。これら観賞用植物の流行り廃りは時代ごとの人々の嗜好や価値観と結びついており、その時代変遷や転換要因を検討することは、我が国の園芸あるいは緑化文化を理解する上で意義あることと考える。

本研究では“アジサイ”に注目し、この課題に取り組んだ。これは昨今、アジサイ（狭義のアジサイ (*Hydrangea macrophylla* (Thunb. ex Murray) Ser. f. *macrophylla*) を始めとして、他の園芸品種も多様に用いられる）を観賞対象とした「ア

ジサイ寺」や「アジサイロード」「アジサイ電車」が各地で人気を博しており、人目に付く斜面や沿道に多く植栽されてきた灌木の花木であるためである。しかし、例えば多くの植物が詠まれている万葉集においてアジサイはわずか2首しか詠まれておらず<sup>18, 57)</sup>、今日とは大きな嗜好のズレが生じている。また、江戸時代には例えばオモト (*Rohdea japonica* (Thunb.) Roth) やアサガオ (*Ipomoea nil* (L.) Roth) 等の園芸植物の大流行が幾度も訪れた<sup>44)</sup>が、アジサイがその対象になったという記録は、現在の所、知られていない（例えば小笠原（2008）<sup>40)</sup>）。すなわち、今日、アジサイは最もポピュラーな花木の一つでありながら、その歴史的な利用・文化についてはいくつかまとめられているものの<sup>2, 18, 57)</sup>、今日のアジサイブームの直接的な契機すなわちアジサイを多数群植することの価値観の成立過程は十分には検討されていないのである。そこで本研究は、アジサイの植栽利用に対する嗜好の時代変遷を考察することで、我が国の緑化文化の一端を明らかにすることを目的とした。

なお、関連する既往研究としてはツタ (*Parthenocissus tricuspidata* (Sieb. & Zucc.) Planch.)<sup>33)</sup>、ハス (*Nelumbo nucifera* Gaertn.)<sup>55)</sup>、ツツジ類<sup>41)</sup>、朝顔雑誌<sup>26)</sup>等があり、また接木技術<sup>35)</sup>あるいは法面緑化工<sup>12)</sup>の歴史変遷に関するもの等もある。

## 2. 研究方法

アジサイとは、日本ではアジサイ属 (*Hydrangea*) に含まれる種（園芸品種を含む）の総称である<sup>21)</sup>。本研究では、まず今日的なアジサイの嗜好以前の状況を把握するため、昭和期以前を中心としたアジサイについての文献類を渉獣して、特に植栽利用に関わるものについての記述を時代ごとにまとめた。文献については古典文学、造園・園芸関係または関連しそうな書籍類、絵画類ができるかぎり調べた。次に、今日のようなアジサイブーム、すなわち観光対象としてのアジサイの起源を調べるため、東口ら（2013）<sup>8)</sup>に習い、1924年に日本旅行文化會から出版された日本初の本格旅行雑誌である『旅』を対象に、古い巻号からの全文読破によって「アジサイ」を観光対象とした記事の初出を探した。さらに、今日の

アジサイブームの一翼を成す「アジサイ寺」に着目し、現在の著名なアジサイ寺に対してヒアリングを行った。対象としたアジサイ寺は、『日本のアジサイ図鑑』<sup>20)</sup>の巻末資料に載っている「アジサイ園、庭園、名所リスト」内の電話番号が記載されている寺院（93ヶ所）とし、電話によって2013年～2014年に実施した。ヒアリング内容は、①アジサイの植栽開始時期、②アジサイの選定理由の2つとし、アジサイをテーマとした観光寺院としてのアジサイ寺の契機を調べた。最後にこれらをまとめ、アジサイの植栽に対する嗜好の時代変遷を考察した。

### 3. 結 果

#### 3.1 時代ごとのアジサイの植栽利用の変遷

アジサイの植栽に関する文献記述等を、時代毎にとりまとめて表-1に示した。

##### 3.1.1 飛鳥・奈良時代

アジサイの文献上の初出は『万葉集』とされ<sup>57)</sup>、2首がある。この内、橘諸兄の歌は右大弁丹比国人宅すなわち政府高官（右大弁）宅の庭に咲いていたアジサイを詠み込んだものとされる<sup>57)</sup>。その歌中にある「八重咲く」を重弁花品種と捉えて当時既に栽培繁殖が行われていたという指摘<sup>29)</sup>もあるが、「花の豊かさをたたえて、七重、八重、九重と形容したのは当時からの一般的風潮であった」<sup>57)</sup>と解釈する方が妥当と言える。

##### 3.1.2 平安時代

この時代の庭にアジサイが植栽されていたという指摘<sup>18)</sup>があるものの、具体的な根拠は示されていない。これに対し、源俊頼の歌の序より、庭で栽培されていたや栽培はかなり普及していたとする指摘<sup>23)</sup>もある。一方、平安時代の庭園植物に関する文献を詳細に調べた河原（1999）<sup>19)</sup>において、アジサイについては全く触れられていない。同様に、平安時代の庭園での発掘調査での種実等の確認状況や文献によって別荘や寺院・神社の植栽植物をも調べた飛田（2002）<sup>7)</sup>も、アジサイの植栽には言及していない。さらに、平安時代の勅撰和歌集に詠まれた植物への行為内容を調べた七海ら（2013）<sup>34)</sup>でも、アジサイの植栽は認められていない。なお、当時を代表する文学作品であり約110種の植物が書かれている『源氏物語』<sup>31)</sup>でも、アジサイは登場しない。『源氏物語』に記された植物は明確な象徴性を有していると指摘され<sup>10)</sup>、当時アジサイに対する特別な意味合いは強くは付与されていなかったものと推察される。この『源氏物語』や同じく代表的文学『枕草子』<sup>48)</sup>にもアジサイが取り上げられなかったことから、当時の宮廷貴族の庭ではほとんど植えられていなかったとの指摘<sup>57)</sup>もある。

##### 3.1.3 鎌倉時代

先の河原（1999）<sup>19)</sup>・飛田（2002）<sup>7)</sup>では、鎌倉時代もアジサイの植栽については言及されていない。また、園芸品種として栽培されるようになった<sup>2)</sup>、広く庭園に植えられていた<sup>18)</sup>という指摘もあるが、いずれも特に根拠は示されていない。他方、『古来風体抄』<sup>4)</sup>の「庭のあぢさひの…いみじく捨

てがたく見ゆる」は、アジサイが庭に存在し鑑賞されていたこと示す資料となっている。この時代には他にも「庭のあぢさい」<sup>3)</sup>や「植ゑしあぢさい」<sup>51)</sup>と詠んだ歌がある。前者は植栽か自生かは判然としないが、後者は明らかに植栽行為を表しており、それ故に他の「庭のあぢさい」も植栽されたものである可能性が強い。ただし、川沿いの自生の群落を詠んだと思われる歌も同じ歌集<sup>3)</sup>にあり、全てが植栽されたものは断定できない。

##### 3.1.4 室町・安土桃山時代

先の飛田（2002）<sup>7)</sup>は、この時期もアジサイの植栽例は言及していない。ただし、京都方面で広く庭園に植えられていたという指摘<sup>29)</sup>もある。また『大乗院寺社雜事記』<sup>59)</sup>には庭園植物として記されており<sup>18)</sup>、大乗院すなわち現在の興福寺（奈良県奈良市）の庭園植物として、アジサイと寺との結び付きを示す資料として重要である。

##### 3.1.5 江戸時代

江戸時代になると、庭園で普通に植栽されていたとされる<sup>18, 49)</sup>。そして、『広益地錦抄』<sup>15)</sup>のアジサイの項の記述より、アジサイが花の少ない梅雨時に咲く花として庭木や切り花で重宝されていたことが示唆される。松尾芭蕉のアジサイを詠んだ句<sup>52)</sup>も、庶民の庭にアジサイが普通に見られたことを示している。また、故事を描いた唐人物図ではあるものの庭園にアジサイが咲く屏風絵（図-1：手前）も知られ<sup>24)</sup>、そこにはアジサイが1株のみ植えられており、当時、庭園において群植はされていなかったことが見て取れる。さらに庭園のみならず、江戸の幾つかの通り等にも植えられていたとい

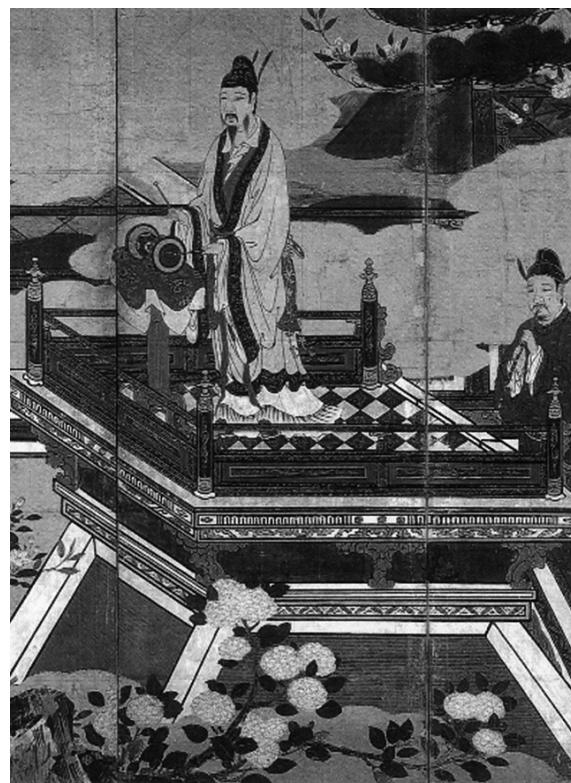


図-1 狩野派『羯鼓催花』<sup>24)</sup>（部分）

表-1 時代ごとのアジサイの植栽利用の変遷

| 時代区分 <sup>注1)</sup>  | 内 容   | 原典   | [引用]  |
|--|---|--|---|
| 飛鳥・奈良<br>759<br>奈良   | 『万葉集』にて、大伴家持が「言問わぬ木すら味狹藍諸弟らが練りの村戸にあざむかえけり」、橘諸兄が「安治佐為の八重咲くごとく彌つ世にをいませわが背子見つつ偲はむ」と詠んだ。  | 46   | [18, 57]  |
|  | 『万葉集』の橘諸兄の歌「安治佐為の八重咲く…」を例に取り、「既に現在見る様な八重の花が成立してゐたと見なければならぬ、而して之は自然に発生したものを何人かが發見して繁殖したものであらう」としている。   | 29   |   |
| 平安 (794-) 平安<br>1128 頃<br>平安-鎌倉  | 「寝殿造でアジサイが使用されていた」とある。<br>『散木奇歌集』で源兼頼が詠んだ「あぢさゐの花のよひらにもる月を影もさながらをる身ともなが」の序に「殿下にて…よめる」と記述されているのを例に取り、「アジサイは栽培されたものである」としている。  | 18<br>28   | [23]  |
|  | 「栽培は平安・鎌倉時代になってかなり普及していたと思われる」とある。  | 23   |   |
|  |   |  |   |
| 鎌倉 (1185-) 1201<br>1249-1256 頃<br>1310 頃<br>鎌倉<br>鎌倉-室町  | 『古来風体抄』に「庭のあぢさひの、よひらに置ける露に、夕月夜のほのかにやどれるなどは、いみじく捨てがたく見ゆる」と記述された。<br>藤原知家が「いまもかもきませわがせこ見せもせむ植ゑしあぢさゐ花咲きにけり」と詠んだ。<br>衣笠内大臣が「とぶ蛩ひかり見えゆく夕暮れになほ色残る庭のあぢさゐ」「花咲きし庭のあぢさひあぢきなくなどてよひらに我をすつけむ」と詠んだ。<br>「園芸品として栽培されるようになった」とある。<br>「手毬咲が広く庭園に植えられていた」とある。  | 4<br>51<br>3<br>2<br>18  | [18]<br>[57]<br>[57]                            |
|  |   |  |   |
|  |   |  |   |
|  |   |  |   |
|  |   |  |   |
| 室町・安土桃山 (1336-) 1480 頃<br>1947<br>室町後期-江戸前期  | 『尺素往来』で夏の花に加えられていることを例に取り、「京都方面で廣く庭園に植えられてゐたものと考へられる」としている。<br>『大乘院寺社雜事記』に5月の庭園植物として記述された。<br>『胡蝶物語』に「あぢさゐの四ひらに咲ける花の枝 折りて仏に手向けにやせむ」と記述された。  | 11<br>59<br>60   | [29]<br>[18]<br>[18, 57]                        |
|  |   |  |   |
|  |   |  |   |
|  |   |  |   |
| 江戸 (1603-) 1694<br>1695<br>1698<br>1709<br>1719<br>1824-1830<br>1829<br>1829<br>1834<br>1835-1841<br>詳細不明<br>詳細不明<br>江戸<br>1804-1818 頃 | 松尾芭蕉が「紫陽花や藪を小庭の別座敷」と詠んだ。<br>「右植分二八月指木ニハ四五月時分よし野土に合肥用べし」と記述された。<br>「赤土を好む暑を恐る夏日は水をしばしばそぐべし陰地にはよろしからず」「春のはじめ、成は八九月わかちうふべし又さしてもつく」と記述された。<br>「山林ニアリ枝ヲサシテモ活ク」と記述された。<br>「六月はなさく花木も拂底なる時節にてなかめにたれり植てあひすへし生花にしてつよし」と記述された。<br>歌川国貞『ゑん日乃景』に青い手毬咲きアジサイが描かれた。<br>唐あじさいの頃に「日向の場所が程よい」「植替えの時節二月九月」「根分の時節二月」「挿し木五月」と記述された。<br>アジサイに関する論文で「日本の庭園にも一般に栽培され」と記述された。<br>「小梅通り植木や」がアジサイの名所として記述された。<br>『フローラ・ヤボニカ』におけるアジサイの解説で、「我々はこれを Sinsju の僧侶の庭園から得た」と記述された。<br>狩野派（作者不明）『羯鼓催花』屏風に故事として庭園のアジサイが描かれた。<br>戸山荘について「花畠は蘆山寺近くにあり…あぢさゐ…等植えられてゐる」と記述された。<br>「ごく一般的な庭園植物となっていた」とある。<br>『市隠月令』に「紫陽花いとすゞし、秋葉裏門通、上野屏風板門内、吾嬬森、柳島通にもあり」と記述されているのを例に取り、「江戸のあぢこちにアジサイの植えられていたことを知りうる」としている。 | 52<br>14<br>16<br>17<br>15<br>30<br>49<br>22<br>50<br>42<br>18<br>32 | [57]<br>[57]<br>[40, 45]<br>[24]<br>[6]<br>[57] |
|  |   |  |   |
|  |   |  |   |
|  |   |  |   |
|  |   |  |   |
|  |   |  |   |
|  |   |  |   |
|  |   |  |   |
|  |   |  |   |
|  |   |  |   |
|  |   |  |   |
|  |   |  |   |
| 明治 (1868-) 1889<br>1897<br>1900<br>1911  | 安達吟光『東京名所 花競 招魂社庭中 紫陽花』に現・靖國神社の庭内に咲くアジサイが描かれた。<br>「肥料さへ與へて培養するときは、年々歳々花を咲かずと云ふことなし」「これを繁殖せしめんとするときは、梅雨の頃に枝を剪りて、陰湿の地に挿し、又は根分の法に依るべし」「紫陽花は、元來陰湿の地を好むものなれば、これを露地に栽うべからず。若し露地に栽うるときは、漸次萎縮して終に消滅するに至るべし」と記述された。<br>「造家と築庭」の当時の推奨庭木のリストが引用され、そのリストにアジサイが認められる。<br>「人多く築き山の片隅手水鉢のほとりなどに植えて、したたる如き緑の葉と共に其花を賞す」「庭園に栽培する外、尚ほ山地に自生するものもあり」「花には二様ありて、外國の花は大形の花夢を具ふるのみにして両蕊を欠くこと多けれども、稀には全花皆かくの如き花辨様の萼を具ふることもあり」と記述された。  | 注2)<br>5<br>54<br>27   | [45]<br>[7]                                     |
|  |   |  |   |
|  |   |  |   |
|  |   |  |   |
|  |   |  |   |
| 大正 (1912-) 1915  | 「又車阪の中程に枕たる小丘有りて、古株の紫陽花有り、崇一丈有餘にて、廣三間許なり、其開花に方りてや、淡紫淺碧なる球状の花は、重疊連綴して、麗觀美図、いはん方無し、…是も今は三十年前の一夢に歸して、其丘其花と共に跡方も無し」と記述された。  | 47   |   |
|  |   |  |   |
| 昭和 (1926-) 1932<br>1940<br>戦後  | 「今日我邦デハ庭園中ニ在テ普通植物ノートナッテ居ル」と記述された。<br>「東京市内に於ても諸方の公園や廣場に之が植込まれて壯觀を呈する様になった」と記述された。<br>セイヨウアジサイの本格的な輸入が始まる。   | 25<br>29<br>21   | [57]  |
|  |   |  |   |
|  |   |  |   |

注1) 時代区分については、国文学資料や戦前までの図書・図版類が原典の場合は発行年で区分し、戦後以降の図書で特定の時期の出来事や状況を述べている場合はその時期で区分した。

注2) 図版類（錦絵・屏風絵）は、それらが紹介された現代図書の引用を示した。

指摘<sup>57)</sup>もある。

アジサイに限らず、江戸時代には園芸文化が発達し庶民が普通に植物を売買するようになったため、それに伴った植木産業の発展が知られている<sup>9)</sup>。そして植物の栽培・増殖法に関する出版物が発刊されるようになり、その中にはアジサイについて記したもののがみられるようになる<sup>14, 16, 30)</sup>。一部の本草書<sup>17)</sup>でも、その増殖法について言及されていた。また、縁日の植木屋の錦絵には、アジサイの絵が描かれているものも認められた（図-2：右端）<sup>40, 45)</sup>。根際部分が明確には描かれていないものの、丈のあるアジサイであること、また他の鉢物のような鉢が描かれていないことから、地植え用の根鉢を卷いた植木と推察される。そしてこのような植木屋が集積する地区は観光名所にもなり、江戸の名所を紹介した『みやびのしをり』<sup>22)</sup>には「小梅通り植木や」（現在の東京都墨田区向島）がアジサイの名所として挙げられている。アジサイ専門の植木屋が一つの通りに建ち並び、通りに沿って花が多数群れ咲く光景が生じたことで名所と化したと推察される。ただし、この名所案内記には、桜や月等の名所が計 978 カ所挙げられる中、アジサイについては先の 1 カ所のみであった。また、江戸後期の代表的な江戸名所案内記『江戸名所花曆』<sup>43)</sup>には、アジサイの名所は全く記されていない。このように、名所という視点で見る限り、今日のようなアジサイブームとは言い難い状況であったことが確認された。

山本（1981）<sup>57)</sup>は『胡蝶物語』<sup>60)</sup>の「お伽草子」を例に取り、



図-2 歌川国貞『ゑん日の景』<sup>40, 45)</sup>（部分）

「仏への供花」そして「寺とアジサイの取合せ」の初出であると指摘している。そして、この「お伽草子」にある物語の成立は江戸時代より 300 年前からであるとして、アジサイと仏教の関わりは室町時代に始まるとの指摘<sup>18)</sup>もある。同じく山本（1981）<sup>57)</sup>は、『フローラ・ヤボニカ』<sup>50)</sup>において *H. otakusa* として描かれたアジサイをシーポルトは「僧侶の庭園」から株を得たことを紹介している。これも、「僧侶の庭園」すなわち寺の庭にアジサイが栽培されていたことの証拠といえる。なお、当時の代表的な寺院の庭園案内記『都林泉名勝図会』<sup>1)</sup>には、アジサイと同定できる植物描写は認められなかった。

### 3.1.6 明治・大正・昭和初期

安達吟光の錦絵（図-3）<sup>45)</sup>には、東京の招魂社すなわち現在の靖国神社（東京都千代田区）がアジサイの名所として描かれている。地際部が画の枠外であり鉢物か地植えか不明であるが、当時、アジサイに特化した植木市が招魂社で立つとは考え難く、地植えのアジサイであった可能性が強い。また、小澤（1915）<sup>47)</sup>は明治改年に伴い江戸の大名庭園あるいは社寺の庭園が破壊される様をつぶさに報告する中で、寛永寺（東京都台東区）の一角にかつてアジサイの古株が咲き誇っていたことを記している。

一方、松山（1911）<sup>27)</sup>は庭での植栽適地や鑑賞の仕方を述べており、花のみならず葉の瑞々しさにも鑑賞価値を認めて



図-3 安達吟光『東京名所花競招魂社庭中 紫陽花』<sup>45)</sup>

植栽を薦めている。また、明治中期には庭への推奨植栽樹のリスト<sup>54)</sup>にアジサイは挙げられており、旧来の和風の庭園のみならず当時広まりつつあった自然風の庭園<sup>55)</sup>でも庭木として受け入れられていたと言える。これは牧野（1918）<sup>25)</sup>の学術雑誌における紹介文からも、庭園植物として広く用いられていたことが裏付けられる。さらに、東京の公園や広場に植えられて壯觀を呈したという指摘<sup>29)</sup>もあり、庭園のならず公共緑地への植栽も広まっていたと考えられる。

一方、海外でアジサイの品種改良が盛んになったのは、1910年のロンドン万国博にてフランスで品種改良されたアジサイが出品されてからだとされる<sup>13)</sup>。その翌年の1911年には、外国から新たなアジサイの品種が輸入されていたことを示唆する記述<sup>27)</sup>が認められる。これより、1910年頃には既に日本にセイヨウアジサイ (*H. macrophylla* (Thunb. ex Murray) Ser. f. *Hortensia* (Lam.) Rehder) が入ってきていたと推察される。ただし、このセイヨウアジサイは当時、ほとんど一般に普及しなかったとされる<sup>56)</sup>。これは例えば、明治～昭和初期の我が国の園芸史をまとめた『日本園芸發達史』<sup>36)</sup>には他の西洋園芸花卉類が数多く紹介される中、セイヨウアジサイについて一切触れられていないことからも裏付けられる。

### 3.2 旅行雑誌『旅』におけるアジサイの記述

1924年の創刊号からアジサイに関する記述の初出を調べた結果、1925年の2巻5号において、既に伊豆大島（東京都大島町）の旅行記の中で「幽邃たる縁陰に百合紫陽花の香漂ふ七八月」<sup>37)</sup>と記述されていた。このアジサイは、大島内に自生するガクアジサイ (*H. macrophylla* f. *normalis* (Wilson) Hara) またはタマアジサイ (*H. involucrata* Sieb.) と推察されるが、ユリとともに“香り”に価値が置かれている点が注目される。そして明言はしていないものの、「香漂う」の言葉からは島内の随所に多数咲き乱れている光景が仄めかされている。このように近代的な観光の対象として、両性花を有する故に香気の強いアジサイ、それも島嶼の野生のアジサイの群生する様（を暗示する内容）が初出となっていることが確認された。

一方、「アジサイ寺」の初出に関しては、1964年の38巻3号において明月院（神奈川県鎌倉市）がアジサイの名所として言及されており<sup>38)</sup>、1968年の42巻3号ではその明月院に対し「アジサイ寺」<sup>39)</sup>の通り名が初めて用いられていた。

### 3.3 アジサイ寺の成立時期と植栽理由

ヒアリングの結果、寺院93カ所中60カ所より回答が得られ、残りの33カ所は連絡が取れなかった。アジサイの植栽時期については、14カ所は不明との回答であったが、46カ所から回答が得られた（図-4）。植栽時期が判っている寺院では、長法寺（岡山県津山市）が1870年代末と最も早かった。この長法寺は、同市にあった津山城を1870年代末に取り壊した際に、「アジサイの間」と呼ばれる部屋にあった腰高障子を譲り受けた縁で境内にアジサイを植え始めたという回答であった。次いで岩船寺（京都府木津川市）の1936年であり、竹藪の繁茂と松枯れで境内が荒れていたため、緑化

目的で葉の多く茂る灌木で活着のよいアジサイを植えたという回答であった。また、戦後（本報告では1940年代として扱っている）として、湧水のある斜面の土留めのためにアジサイを植えたと回答した覚園寺（神奈川県鎌倉市）も比較早い時期の植栽であった。同じく鎌倉市の明月院も戦後（同上）としたが、当時の関係者が入れ替わっており、明確な時期・理由は不明との回答であった。明月院の植栽時期は、山本（1979）<sup>56)</sup>によれば1951年ごろとされ、当時の住職が垣根の代わりにするために知人から譲り受けたヒメアジサイ (*H. serrata* (Thunberg) Seringe ‘Hime-ajisai’) 系の品種を植栽したとしている。続く1950年代は麻綿原高原の妙法生寺（千葉県大多喜町）1カ所のみであり、供養会の時期に咲く花として1953年から植え始めたとの回答であった。1960年代以降になると植栽開始寺院数が多くなり、1980年代が最も多くなっていた。すなわち、1960年代以降にアジサイが群植される現在のようなアジサイ寺が各地に広まったことが示された。

アジサイの植栽理由（図-5）については、最も多かったのは「生育特性が合っている」であった。これは日陰や湿った場所、斜面でも良好育ち、挿し木による株分けが容易という特性によると考えられる。次に多かった「供花・人に楽しんでもらう」は、仏に供えるためとともに、その時期に他の植物があまり花を咲かせないため参拝者向けに選ばれたと考えられる。なお、その他には「苗を頂いたから」「子供の情操教育のため」「アジサイが好きだったから」「鎌倉のアジサイ寺を見てまねをした」等が挙げられていた。

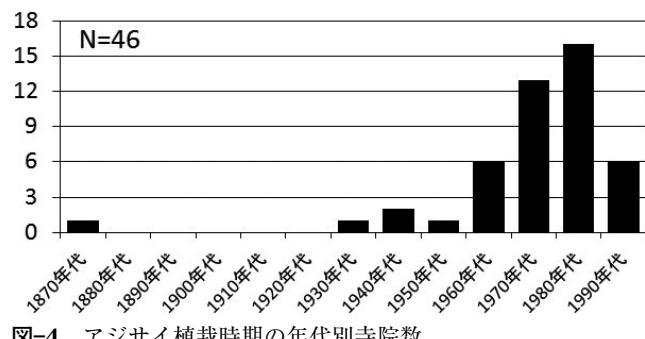


図-4 アジサイ植栽時期の年代別寺院数

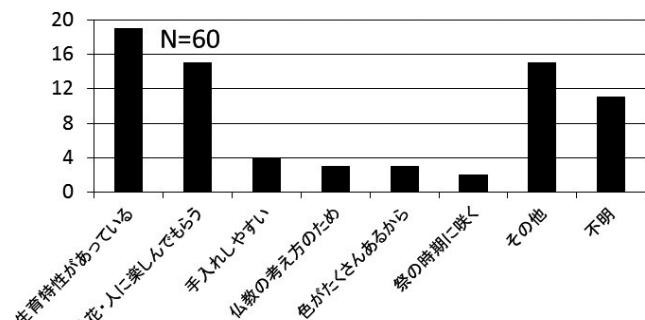


図-5 アジサイを植栽した理由（複数回答あり）

#### 4. 考 察

アジサイが確認された最も古い文献は奈良時代の万葉集であり、既に観賞対象として庭に植栽されていたことが、まず特筆された。当時の貴族の庭について飛田（2002）<sup>7)</sup>は、必ずしも園池を設けた本格的な庭園ではなく、家屋から見て楽しめるように山採りの樹木や草花を植えた程度のものが一般的であるとしている。このため、周囲の山から採ってきたアジサイを植栽したものと考えるのが妥当である。ただし、万葉集における歌数の少なさ（2首のみ）や続く平安時代でも庭へのアジサイ植栽に関する資料が極めて少ないことを鑑みると、飛鳥・奈良～平安時代にかけてアジサイは必ずしも一般的な庭園植栽種ではなかったと言える。鎌倉時代になると「庭とアジサイ」の組合せが詠まれた歌が幾つか散見されるようになる。アジサイの自生するような崖地・斜面地・流れの傍に居を構えた場合もあると思われるが、「植ゑし」と直接的な植栽行為も詠まれており、また「手毬咲が広く庭園に植えられていた」<sup>18)</sup>とする指摘も含め、庭への植栽が広く行われていたことが示された。続く室町～安土桃山時代には、今日的な組合せである「寺とアジサイ」に関する資料が初めて認められた。

江戸時代に入ると、季節を象徴する花として広く人々に受け入れられたようで、大名の庭園や庶民の庭、寺の庭に植栽されたことを示す資料が引き続き得られている。そして園芸書等に栽培・増殖法が記されるようになったこと、江戸の名所の一つになるほどのアジサイに特化した植木屋集積地が存在したことが特筆された。特に後者は、当時の庭木や鉢植用のアジサイの需要の多さを示唆するものである。ただし、江戸時代には今日のようなアジサイブームは遂に一度も訪れなかった。江戸期の園芸職人の世界では、栽培が容易で挿し木で簡単に増やせるアジサイは注目されなかったという指摘<sup>18)</sup>もあり、奇品や珍品が好まれる流行に乗るにはこれらが負に作用したと考えられる。また、「江戸時代にはアジサイに不吉、陰気、仏事の花というイメージがあった」<sup>18)</sup>や「よひら（四葩：アジサイの別称）の四が「死」に通じるため、縁起が悪い」<sup>56)</sup>との指摘もあり、これらの負のイメージが作用した可能性もある。しかしながら、庭園では単体あるいは少数で植栽されることが一般的であったと思われるアジサイが、植木屋通りに沿って花が多数群れ咲く光景に名所という価値が見いだされた点は、今日のアジサイブームにおける群植するスタイルに通じるものがあり、その萌芽と言える。

明治時代以降は、セイヨウアジサイの輸入が始まるが、直ぐには今日のようなブームにはならず、人々のアジサイに対する嗜好には未だ大きな変化はなかったものと判断される。ただし庭への植栽は普通に行われており、「神社とアジサイ」の組合せの資料も確認された。さらに公園等に植栽された様に対し「壯觀」<sup>29)</sup>と表現されており、群植がなされていた可能性が残る。また雑誌『旅』では、既に1925年にはアジサイを観光資源の1つとして紹介しているものの、それは島嶼というエキゾチズムの文脈の中で述べられており、野生の

アジサイが群生する様に価値が置かれていた。この雑誌『旅』において、最初に観光対象として「アジサイ寺」と呼称されたのは明月院であった。明月院の以前あるいは同時期にアジサイを境内に植栽していた寺院は幾つか認められたが、いずれも縁故あるいは緑化適種であることが直接の植栽理由であり、花を見せるという観光資源としての色合いは決して強いものではなかった。これは明月院も同様である。ただし、「1965年ごろから、それまでの庭に少し残っていたのを増やし始めた」<sup>58)</sup>ことから境内に群生するようになり、それが口伝てに広がって1968年には雑誌『旅』で「アジサイ寺」と呼ばれるまで至っていた。それまでの庭園や寺社の庭の植栽には必ずしも群植を示す記述・表現は認められず、花の少ない時期に参道に沿って青い大きなヒメアジサイの花が咲き誇る姿に「群生するアジサイの花の美」と言う新たな観賞価値が発見されたと言える。明月院では当初名所化を意図して植栽・増殖を行った訳ではないが、境内に群生する姿と今の時代の人々の嗜好とが合致した結果といえる。これには、明月院が鎌倉という関東随一の寺社仏閣の林立する主要観光地にあったことも寄与した可能性もある。

以上、本報告では鎌倉時代頃から庭への植栽が普通となり、江戸時代には「花が多数群れ咲く」ことへの嗜好の萌芽が認められたことをまず明らかにした。そして戦後になって明月院に群生するアジサイが多く人の目に止まり、これまでには無かった新たな観賞価値がアジサイに付与され、今日的な嗜好が確立していった過程を明らかにした。この理由として、山本（1979）<sup>56)</sup>は「権威や格式のけしとんだ、自由で解放された敗戦後の空気が、急にアジサイを日のあたる場所へと押し出したのでは」と述べている。この「自由で解放された空気」とは、戦後の高度経済成長期を経てメディア等を介して季節の花の名所を訪れるスタイルの余暇活動が定着したことと考えるが、一方でアジサイが栽培・増殖が容易で大型の花を多数着けるため、花の少ない時期に「群生する花」を演出し易かったことも大きいと思われる。

本報告のアジサイに限らず、我が国の観賞用の緑化植物に対する嗜好の一つの傾向である「群生する花の美」の価値観の成立過程について、その内実や背景を今後詳しく検討する必要がある。しかし、少なくともアジサイに関しては、「庭の花木」を経て「社寺の花」という文化を底辺に持ちつつ、今日の「群生する花の美」が生じたことを見てきた。そこには本報告で明らかにしたよう、古来アジサイに対する日本人のさまざまな植栽行為の蓄積があったことは看過すべきではないだろう。

#### 引用文献

- 1) 秋里籬島（1799）都林泉名勝団会
- 2) 荒垣秀雄・飯田龍太・池坊専永・西山松之助監（1994）四季花ごよみ、講談社、pp. 402-412.
- 3) 藤原長清編（1310頃）夫木和歌抄
- 4) 藤原俊成（1201）古来風体抄
- 5) 原田東一郎（1897）四季和洋 草花培養法、有隣堂、pp. 260-261.

- 6) 飛田範夫 (1998) 江戸時代までの花壇についての史的考察, ランドスケープ研究, 61(5): 385–388.
- 7) 飛田範夫 (2002) 日本庭園の植栽史, 京都大学学術出版会, 435 pp.
- 8) 東口涼・今西純一・飯田義彦・森本幸裕 (2013) 奈良県吉野山の土地利用の変遷と旅行雑誌から見た景観受容の変化. ランドスケープ研究, 76(5): 601–604.
- 9) 平野恵 (2006) 十九世紀日本の園芸文化, 思文閣出版, 503 pp.
- 10) 廣江美之助 (1969) 古典植物全集第5巻 源氏物語の植物, 有明書房, 330 pp.
- 11) 一条兼良 (1480頃) 尺素往来
- 12) 飯塚隼弘・近藤三雄 (2010) 日本における「のり面緑化工」の起源と変遷について, 日本緑化工学会誌, 36(1): 15–20.
- 13) 石井勇義 (1935) 原色花卉類圖譜, 誠文堂新光社, pp. 122–123.
- 14) 伊藤伊兵衛三之丞 (1695) 花壇地錦抄
- 15) 伊藤伊兵衛政武 (1719) 広益地錦抄
- 16) 貝原益軒 (1698) 花譜
- 17) 貝原益軒 (1709) 大和本草: 卷之七 (花草類)
- 18) 柏岡精三・荻菴樹徳 (1997) 絵で見る伝統園芸植物と文化, アボック社, pp. 154–158.
- 19) 河原武敏 (1999) 平安鎌倉時代の庭園植栽, 信山社, 216 pp.
- 20) 川原田邦彦・三上常夫・若林芳樹 (2010) 日本のアジサイ図鑑, 柏書房, pp. 182–191.
- 21) 川島榮生 (2010) アジサイ百科, アボック社, 623 pp.
- 22) き、すのや・則房 (1834) みやびのしをり, 北島順四郎.
- 23) 木下武司 (2010) 万葉植物文化誌, 八坂書房, 654 pp.
- 24) 京都国立博物館 (2007) 特別展覧会 狩野永徳, 毎日新聞社・NHK・NHKきんきメディアプラン, pp. 218–219, 275–276.
- 25) 牧野富太郎 (1918) あぢさゐ, 植物研究雑誌, 2(1): 口繪
- 26) 丸山宏 (1994) 明治期における朝顔雑誌の創刊とその展開. 造園雑誌, 57(5): 31–36.
- 27) 松山亮蔵 (1911) 国文学に現れたる植物考, 寶文館, pp. 18–19.
- 28) 源俊頼 (1128頃) 散木奇歌集
- 29) 宮澤文吾 (1940) アヂサヰ, 花木園芸, 八坂書房, pp. 11–19.
- 30) 水野忠暁 (1829) 草木錦葉集
- 31) 紫式部 (1008) 源氏物語
- 32) 村田了阿 (1804–1818頃) 市隱月令
- 33) 中尾裕介 (2001) 和歌におけるツタの観賞の視点について. ランドスケープ研究, 64(5): 379–384.
- 34) 七海絵里香・森崎翔太・大澤啓志 (2013) 万葉集および平成期の勅撰和歌集にみる植物に対する行為. 日本緑化工学会誌, 39(1): 74–79.
- 35) 七海絵里香・大澤啓志・勝野武彦 (2011) 造園樹木における接木技術の歴史および技術継承に関する研究. ランドスケープ研究, 74(5): 405–408.
- 36) 日本園藝中央會 (1943) 日本園藝發達史, 朝倉書店, 800 pp.
- 37) 日本旅行文化會 (1925) 旅, 2(5): 20–25.
- 38) 日本旅行文化會 (1964) 旅, 38(3): 110–113.
- 39) 日本旅行文化會 (1968) 旅, 42(3): 170.
- 40) 小笠原左衛門尉亮軒 (2008) 江戸の花競べ, 青幻舎, 115 pp.
- 41) 大出英子 (2008) 日本の伝統的園芸植物としてのツツジ類の歴史について, 目白大学短期大学部研究紀要, 44: 47–60.
- 42) 岡隈三郎 (1939) 戸山壯に就いて, 造園雑誌, 7(2): 83–92.
- 43) 岡山鳥 (1893) 江戸名所花曆
- 44) 小野佐和子 (1985) 江戸時代における園芸植物の流行について. 造園雑誌, 48(5): 55–60.
- 45) 太田記念美術館 (2009) 特別展 江戸園芸花尽くし, 太田記念美術館, 151 pp.
- 46) 大伴家持編 (759) 万葉集
- 47) 小澤圭次郎 (1915) 明治庭園記, 明治園芸史, 日本園芸研究會, pp. 149–488.
- 48) 清少納言 (不詳) 枕草子
- 49) Siebold, P.F. (1928) Synopsis *Hydrangeae generis specierum Japonicarum*. Nova Acta Physico-Medica Academiae Caesareae Leopoldino-Carolinae Naturae Curiosorum, 14: 686–692.
- 50) Siebold, P.F. and Zuccarini, J.G. (1835–1841) Flora Japonica, Vol. 1
- 51) 真觀編／真觀・家良編 (1249–1256頃) 現存和歌六帖
- 52) 子珊瑚編 (1694) 別座鋪
- 53) 鈴木博之 (2013) 庭師 小川治兵衛とその時代, 東京大学出版会, 282 pp.
- 54) 竹貫直次 (1900) 造家と築庭, 博文館, 260 pp.
- 55) 渡辺達三 (1994) ハスの観照の歴史的変遷について. 造園雑誌, 57(5): 19–24.
- 56) 山本武臣 (1979) グリーンブックス 53 アジサイ, ニューサイエンス社, 93 pp.
- 57) 山本武臣 (1981) アジサイの話, 八坂書房, 164 pp.
- 58) 米沢寿美子 (1982) 花影の明月院, 自由書館, 227 pp.
- 59) 尋尊ほか (1497) 大乗院寺社雜事記
- 60) 作者不詳 (不詳) 胡蝶物語

(2016年8月30日受理)